

在に近い。ゲームをしている時、そのルールには私達は感知していない。けれどルールを知らないとゲームに参加できない。音楽の経験を積み、直感が培われると、このような媒介コードのようなものにはいちいち感知しないで音楽を楽しんでいる。つまりそれを暗黙的に働かせることに成功しているわけだ。音楽がわかるということは極上の暗黙知なのだ。

つまり「音楽がわかる」ことに貢献しな

いソルフェージュ（聴音も含めて）はありえず、ソルフェージュとはどんな音楽的経験を、将来に向かって発展させることができるような柔軟性を持った力を与えてやるものでなければ、教育的意義はない。ということは、ソルフェージュというものはやがては忘れられるべきものであって、忘れられて（あるいは内化されて、と言った方が無難か）初めてその使命を達成した、と言える運命にあるものなのだ。

## 一般教育の現代的意義

### ＝ その II ＝

山田素子

「人類社会という最大の枠の中で、今日までに、成功を納めてきたと一応思われるものは、西欧文明と云えるでしょう。科学文明は、西欧文明と共に培われてきた。

しかしながら、「地球を共有する人類という観点に立つ現代社会」においては、もはや西欧文明は一つの‘school’（脈・主義）に過ぎないものと考えられる。

その証左として、ルネッサンス以来、絶え間なく続いてきた西欧社会的教育の土台が崩れてきている。いわゆる‘good education’と云われるものは、ギリシャ・ローマ以来の古典の素養が基礎となっている。古典を思索の土壌として、時々の「現代性」が創造され続けてきた。自他ともに認められてきたこの伝統が、今日、西欧社会、特

にアメリカの大学で保持されなくなり、カリキュラムにおいて学生は、古典の素養を必ず要求されることはなくなってきている。このことを憂えて、Allan Bloom は The Closing of the American Mind 「アメリカンマインドの終焉」(1987)、E. D. Hirsch は Cultural Literacy 「教養が国をつくる」(1987) をそれぞれ物している。

今、地球上のあちこちで民族意識の目覚めと、歴史の紐解きが始まっている。そして「人間とは？」という大きな課題を抱えて、「時間」と「空間」の広がりを確かめるとき、地球社会がコンセンサスを得るような教養としてのカリキュラムづくりの必要に迫られている。